

病害虫発生予報 第6号(9月予報)

和歌山県農作物病害虫防除所
TEL 0736(64)2300

<予報の概要>

作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
水稲	いもち病 紋枯病 白葉枯病 トビイロウンカ コブノメイガ イチモンジセセリ 斑点米カメムシ類	やや多 並 並 並 やや少 並 並	野菜全般	ハスモンヨトウ シロイチモジヨトウ	並 やや少
			カンキツ	黒点病 かいよう病 ミカンハダニ チャノキイロアサミウマ	やや少 やや少 少 やや少
トマト、 ミニトマト	黄化葉巻病	県北部：並 県中部：多	カキ	炭疽病 うどんこ病 円星落葉病 角斑落葉病 フジコナカイガラムシ	並 やや少 やや少 やや少 並
野菜全般	アブラムシ類 及びウイルス病 コナガ ハダニ類 ミナキイロアサミウマ ミカンキイロアサミウマ	並 並 並 並			果樹全般

気象予報

1か月予報（予報期間 8月23日～9月22日 大阪管区气象台）

<予想される向こう1か月の天候>

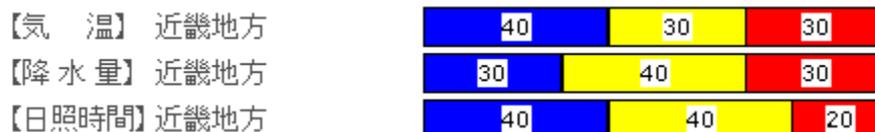
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

近畿日本海側では、天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。近畿太平洋側では、平年に比べ晴れの日が少ない見込みです。

向こう1か月の日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、低い確率50%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>



凡例: ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

9月	月平均気温 (平年値) (℃)		月降水量 (平年値) (mm)	
		和歌山	24.7	和歌山
	潮岬	24.4	潮岬	305

I . 水 稲

1. いもち病(穂いもち)

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県南部の早期栽培における8月上旬の葉いもちの発病株率は0% (平年0%)、穂いもちの発病株率は0% (平年4.4%)であった。
- ② 県北部・中部の普通期栽培における8月上旬の葉いもちの発病株率は7.6% (平年8.8%)、穂いもちの発病株率は0% (平年0%)であった。
- ③ 田辺市龍神村以北の7か所における8月1～27日のBLASTAMによる感染好適条件の2日以上継続日数(感染好適条件が連続して出現した場合を多発条件とみなす)の出現回数は2回(過去5年の平均0.6回)であった。
- ④ 一部のほ場で葉いもちの発生が散見されている。
- ⑤ 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① いもち病に感受性が高い品種(「キヌヒカリ」等)の作付ほ場では今後の気象推移に注意する。

2. 紋枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部の早期栽培における8月上旬の紋枯病の発病株率は4.8% (平年6.8%)であった。
- ② 県北部・中部の普通期栽培における8月上旬の紋枯病の発病株率は9.6% (平年5.6%)であった。
- ③ 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 上位葉への進展がみられるほ場では、薬剤防除を行う。
- ② 過繁茂ぎみのほ場では発生しやすいので、特に注意する。

3. 白葉枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部、県中部、県南部における8月上旬の白葉枯病の発病株率は0% (平年0%)であった。
- ② 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 常発地や台風等で冠水したほ場では発生に注意し、発病を認めたら直ちに薬剤防除を行う。

4. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の普通期栽培における8月上旬の25株あたり生息密度は0頭(平年0.4頭)、県中部の普通期栽培では0.4頭(平年0.2頭)、県南部の早期栽培では3頭(平年0.5頭)であった。
- ② 予察灯による8月1～20日の飛来数は、紀の川市10頭(平年3.9頭)、上富田町0頭(平年0.8頭)、那智勝浦町0頭(平年17.7頭)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ほ場内におけるトビイロウンカの分布はばらつきが大きいので、ほ場全

体の発生状況を的確に把握する。

- ② 成・幼虫が5頭以上生息している株を認めたら薬剤防除を実施する。
- ③ トビイロウンカは株元に生息するので、薬剤が株元に十分到達するように散布する。

5. コブノメイガ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の普通期栽培における8月上旬の25株あたり被害葉数は0.4葉（平年2.1葉）、県中部の普通期栽培では0葉（平年2.7葉）であった。
- ② 紀の川市の蛍光灯誘殺箱による8月1～15日の成虫誘殺数は、0頭（平年5.8頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 9月以降は被害葉率が高くても減収率は低い。また次世代幼虫の出現がないため、防除の必要はない。

6. イチモンジセセリ(イネツトムシ)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の普通期栽培における8月上旬の25株あたりツトム数は0（平年0.1）、県中部の普通期栽培では0（平年0.1）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月下旬～9月上旬に蛹化し9月中旬以降に成虫となるため、防除の必要はない。

7. 斑点米カメムシ類(クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシなど)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① すくい取り調査（捕虫網20回振り）による8月上旬の発生ほ場率および平均成虫数は、県北部の普通期栽培で67%（平年62%）、3.5頭（平年4.7頭）、県中部の普通期栽培で40%（平年81%）、1.2頭（平年8.6頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 晩生品種では、乳熟期～糊熟期に薬剤を散布する。

II. 野菜・花き

<トマト、ミニトマト>

1. 黄化葉巻病

(1) 予報内容 発生量 県北部：並 県中部：多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培トマトおよびミニトマト（家庭菜園を含む）における8月中旬の発生ほ場率は0%（過去8年の平均9.4%）であった。
- ② 県中部の露地栽培トマトおよびミニトマトにおける8月中旬の発生ほ場率は100%（過去8年の平均34.9%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 施設栽培のミニトマトやトマトでは生育初期に感染すると被害が大きくなるため、育苗ほ、本ほとも施設開口部へ目合い0.4mm以下の防虫ネットを展張し、ウイルスを保毒したタバココナジラミの侵入を防止する。さらに、外張り資材に紫外線除去フィルムを使用すると侵入防止効果が高まる。
- ② 定期的な薬剤散布に加え定植期の粒剤処理により、感染適期である育苗

- 期から本ほ初期のタバココナジラミ防除を徹底する。
- ③ 発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、直ちに土中に埋めるか、ビニル袋に密封して完全に枯死させてから処分する。
 - ④ 家庭菜園を含む露地栽培トマトについては、栽培終了後は速やかに全株を引き抜き、野積みにした上に古ビニルなどで2週間以上覆ってコナジラミ類を死滅させる。
 - ⑤ タバココナジラミは寄主範囲が極めて広く、多くの雑草にも寄生するので、施設内および施設周辺の除草を徹底する。

＜野菜全般＞

1. アブラムシ類およびウイルス病（露地野菜全般）

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の露地栽培ナスにおける8月中旬のワタアブラムシの発生ほ場率は20%（平成13%）、寄生葉率は1.0%（平成2.3%）、モモアカアブラムシの発生ほ場率は0%（平成6.2%）であった。
 - ② アブラムシ類の黄色水盤（紀の川市）への8月1～20日の飛来数は、9頭（平成33頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① アブラムシ伝搬性のモザイク病には、アブラムシ類の防除対策としてシルバーマルチを行い、薬剤防除と併用する。
 - ② ハクサイ等の育苗では、防虫ネットで被覆して有翅虫の飛来を防ぐ。

2. コナガ（ダイコン、キャベツ、ハクサイ）

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① フェロモントラップによる8月1～20日の誘殺数は、紀の川市0頭（平成0頭）、和歌山市0頭（過去3年の平均0.3頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 薬剤抵抗性の発達を抑えるために、同一系統の薬剤の連用を避ける。

3. ハダニ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の露地栽培ナスにおける8月中旬のカンザワハダニの発生ほ場率は20%（平成25%）、寄生葉率は1.0%（平成4.2%）、ナミハダニの発生ほ場率は0%（平成10%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 薬剤抵抗性の発達を抑えるために、同一系統の薬剤の連用を避ける。

4. ミナミキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の露地栽培ナスにおける8月中旬の発生ほ場率は50%（平成56%）、寄生葉率は6.0%（平成19.8%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 促成栽培ナス等の育苗は発生ほ場の近くで行わない。また防虫ネットで被覆し、成虫の飛び込みを防ぐ。

5. ミカンキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける8月中旬の発生ほ場率は0%（平成2.4%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ミナミキイロアザミウマに準ずる。

6. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける8月中旬の発生ほ場率は0%（平成11%）であった。

- ② フェロモントラップによる8月1～20日の誘殺数は、紀の川市36頭（平成68頭）、和歌山市94頭（過去3年の平均68頭）、御坊市55頭（平成254頭）、印南町47頭（平成72頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ふ化幼虫の集団が分散するまでの若齢幼虫期に防除するよう心がける。
② 薬剤抵抗性の発達を抑えるために、同一系統の薬剤の連用を避ける。

7. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① フェロモントラップによる8月1～20日の誘殺数は、紀の川市1頭（平成12頭）、御坊市84頭（平成88頭）、印南町7頭（平成83頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 中・老齢幼虫になると薬剤感受性が著しく低下するので、若齢幼虫対象の初期防除に努める。
② 抑制エンドウでは、は種後40～50日間寒冷紗または防虫ネットで被覆を行うと被害が軽減される。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. 黒点病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における8月中旬の発生園率は15%（平成51%）、発病果率は3.9%（平成14.4%）、発病度は1.0（平成3.4）であった。

- ② 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① マンゼブ・マンネブ剤の場合、前回の散布からの累積降水量が250mm程度となった時点で追加散布する。

- ② 8月中下旬に防除できなかった園では、9月上旬に早急に防除を行う。

- ③ 枯枝除去や剪定枝の処理を徹底する。

2. かいよう病

(1) 予報内容 果実発生量 やや少 夏秋梢発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における8月中旬の発生園率（春葉）は12%（平成28%）、発病葉率は0.1%（平成2.4%）、発病果率は0.1%（平成2.3%）であった。

- ② 9月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 罹病性品種の場合、付傷すると果実発病のおそれがある。台風等で強風雨が予想される場合には、事前に銅水和剤（葉害軽減のための措置を講じる）を散布する。
 - ② 夏秋梢の病斑は翌春の強力な伝染源となるので剪除に努める。

3. ミカンハダニ

- (1) 予報内容 発生量 少
- (2) 予報の根拠
 - ① 県予察ほ場（有田川町奥）の8月中旬における100葉あたり雌成虫数は無防除区は0頭（平成8.9頭）、慣行防除区は0頭（平成16.3頭）であった。
 - ② 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における8月中旬の発生圃率は1.5%（平成38%）、寄生葉率は0.1%（平成11.0%）、100葉あたり雌成虫数は0.1頭（平成39頭）であった。
 - ③ 9月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一薬剤は年2回以上使用しない。
 - ② ミカンサビダニの発生にも注意し、本虫にも適用のある有効薬剤を選択する。

4. チャノキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 県予察ほ場（日高郡由良町）における8月15～20日の黄色粘着トラップへの誘殺数は9頭（平成158頭）であった。
 - ② 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における8月中旬の被害圃率は32%（平成41%）、100果あたりの寄生虫数は0頭（平成0.5頭）であった。
 - ③ 9月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 8月中旬以降に有効な殺虫剤を散布していない園および夏秋梢の多い園では、9月の発生に注意する。

<カ キ>

1. 炭疽病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部における8月中旬の発病果率は、「富有」0.1%（平成0.1%）、「刀根早生」・「平核無」0%（平成0.02%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 発病枝や果実がみられる場合は剪除する。
 - ② 降雨が続く場合は追加防除を行う。また、台風が接近する場合は事前に薬剤を散布し、できなかつた場合は台風通過後速やかに散布する。
 - ③ 密植園で風通しの悪い場所は発病しやすくなるので、園内の通風・採光を図り、薬剤をかかりやすくする。

2. うどんこ病

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部における8月中旬の発病葉率は、「富有」5.7%（平成18.7%）、

- 「刀根早生」・「平核無」1.1%（平年2.7%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏をねらって丁寧に散布する。
 - ② 盛夏期には病勢は一時休止するが、秋期になり気温が低下すると再び活発になるので、二次伝染防止に努める。

3. 円星落葉病、角斑落葉病

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部における8月中旬の円星落葉病の発病葉率は、「富有」0%（平年0%）、「刀根早生」・「平核無」0%（平年0%）であった。
 - ② 県北部における8月中旬の角斑落葉病の発病葉率は、「富有」0%（平年0.1%）、「刀根早生」・「平核無」0%（平年0%）であった。
 - ③ 県北部における前年10月の「富有」の円星落葉病の発病葉率は0.5%（平年4.5%）、角斑落葉病の発病葉率は7.1%（平年23.5%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 本病は樹勢が低下すると発病が助長される。
 - ② 角斑落葉病は二次伝染を繰り返すので、多発園では発病後も防除を励行する。

4. フジコナカイガラムシ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部における8月中旬の発生園率は、「富有」76.5%（平年85.9%）、「刀根早生」・「平核無」23.5%（平年39.8%）であった。
 - ② 県北部における8月中旬の寄生果率は、「富有」10.6%（平年17.4%）、「刀根早生」・「平核無」1.2%（平年2.7%）であった。
- (3) 防除上注意すべき諸点
- ① 幼虫は主に果実とへたの間隙部に寄生しているので、薬剤がこの部分にかかるように散布する。
 - ② 薬剤が十分かかるように枝葉の混み合いをなくす。

< 果樹全般 >

1. カメムシ類

- (1) 予報内容 発生量 多
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部における8月中旬のカキの被害果率は、「富有」13.5%（平年5.7%）、「刀根早生」・「平核無」1.3%（平年0.5%）であった。
 - ② 県北部のカキ園地では、8月10日の台風11号通過以降に果樹カメムシ類の飛来が多数みられている。
 - ③ 紀の川市粉河の予察灯における8月中旬のチャバネアオカメムシの誘殺数は887頭（平年126頭）、ツヤアオカメムシが176頭（同37頭）、クサギカメムシが323頭（同71頭）であった。
 - ④ 有田川町奥の予察灯における8月中旬のチャバネアオカメムシの誘殺数は1295頭、ツヤアオカメムシが137頭、クサギカメムシが280頭であった。
 - ⑤ みなべ町東本庄の予察灯における8月中旬のチャバネアオカメムシの誘殺数は1431頭（過去4年の平均594頭）、ツヤアオカメムシが140頭（同447頭）、クサギカメムシが192頭（同449頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 果樹カメムシ類の飛来量は園地間差が大きく、特に山林隣接園では早くから被害が出やすい。

- ② カンキツでは収穫時期の早い極早生で被害が大きいため発生に注意する。
- ③ 園内での果樹カメムシ類の発生及び被害状況をよく観察し、防除は発生に応じて早めに行う。
- ④ 台風通過後や強風後には、一時的に飛来が多くなることがあるので注意する。

本情報は、下記でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ウェブサイト <農作物病虫害防除所コーナー>

[http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/
boujyosyo-yosatsujyohou.html](http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyohou.html)

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所(TEL 0736-64-2300)までお願いします。